

内部保証システムの構築

ー卒業生アンケート実施プロセスと観点ー

吉田尚子, 米澤慎二, 原田 章(追手門学院大学 教育開発センター研究員)
はじめに

追手門学院大学(以下「本学」)は、2017年度に大学評価の申請を予定している。大学評価で着目されているのは「大学内に構築される内部質保証システムの有効性」であり、大学基準協会(2016)では、有効性が高い自己点検・評価の実施ポイント4項目と内部質保証システムのポイント3項目を明示している。本学では、このポイントを参考にしつつ、2015年度から内部質保証システムの有効性について検討を重ね、教育改善や学生支援を充実させる取り組みとして、自主・自律による検証システムを構築してきた。

その一つとして、従来から学生の学生生活満足度についての様々な調査を行ってきた。その中には、入学時に行うアンケートや年次・学期ごとに行う授業アンケート、学生生活実態調査などがある。しかし、学生が自分の学生生活を総括的に評価できる卒業生アンケートは、これまで本学で行われることはなかった。そこで、2015年度よりFDを担当する本学教育開発センターの教職員が検討を重ね、全学体制で2016年3月に卒業生アンケートを実施した。

本発表では、卒業生アンケートの実施過程における項目作成、実施方法の工夫および学修成果の検証をどのような観点から測定しようとしたかについて報告する。また、卒業生アンケートが、内部質保証システムの一つとして有効であるかを検証することとした。

卒業生アンケート実施方法

卒業生アンケートの目的は、追手門学院大学の教育・学生支援が学生の成長にどう役立っているかを調べ、教育の改善や学生支援の充実につなげることとした。調査対象者は、本学2015年度卒業生1,246人で、調査実施日は、本学の学位授与式である2016年3月21日であった。式典終了後、各学部に分かれて行われる講話会場で、質問紙に回答してもらった。質問紙の構成は、(1)学院の教育理念に対する理解度、(2)在学中の活動に対する積極性、(3)大学の施設・サービスに対する評価、(4)在学中に身についた能力に対する自己評価、(5)大学生活に対する満足度、(6)DPに対する自己評価であった。程度を尋ねる項目では、7件法を用いた。ただし、(5)の満足度は、4件法とした。(3)では、質問項目に教員、職員だけでなく、保健室、図書館、食堂や清掃、警備員を含めた。これは、本学のFDの定義では、大学構成員全員が学生の成長に関わっていることを明記しているためである。(4)では、大学IRコンソーシアムの学生調査で用いられている項目を用いた。質問紙の最後に、任意で学籍番号を記入してもらった。

回収率・回答精度向上の方策

本調査では、質問紙の回収率と回答精度を高めるために、以下のような方策を行った。まず、質問紙の作成において、学生の負担を考慮し、回答がしやすくなるよう質問文や紙面構成を検討した。具体的には、設問は1度で目に入る分量の文字数とし、逆転項目は使用しなかった。設問順は、時系列や回答のしやすさを基準とした。また、学生の質問紙に対する抵抗感を少なくするため、色を各学部の「時間割作成の手引き」と同色とした。次に、実施時において、記入の負担を減らすため、クリップペンを添付した質問紙を配布した。記入する机がない会場を用いる学部で

は、質問紙そのものの紙質を厚くした。さらに、質問紙の配布・回収を行う教員が容易に実施できるように、簡便な手順書を準備した。

結果

調査当日、配布した質問紙は1,162部で、すべてを回収した。そのうち、大学院生10名、すべての項目に無回答であった34名を除き、回答が有効であったものは、1,118部であった。卒業生1,246名に対する回収率は、89.7%であった。学籍番号を記入してくれた学生は536名であった。

(1) 学院の教育理念に対する理解度の結果は、「言葉も意味も知っている」が18.0%、「言葉は知っているが意味は知らない」が38.9%、「言葉も意味も知らない」が23.3%であった。(2) 在学中の活動に対する積極性の結果は、ゼミ・演習に対するものが高かった。(3) 大学の施設・サービスに対する評価の結果は、本学で4年に1度実施される「学生生活実態調査」とほぼ同じ傾向を示した。(4) 在学中に身につけた能力に対する自己評価の結果は、各項目において身につけたと回答した学生の割合が高く、項目間に高い正の相関がみられた。(5) 大学生活に対する満足度の結果は、教員や食堂・警備・清掃の人たちに対する評価が高かった。図1は、学生生活に対する全体的な満足度を尋ねた結果である。(6) DPに対する自己評価の結果は、全体的に高かった。

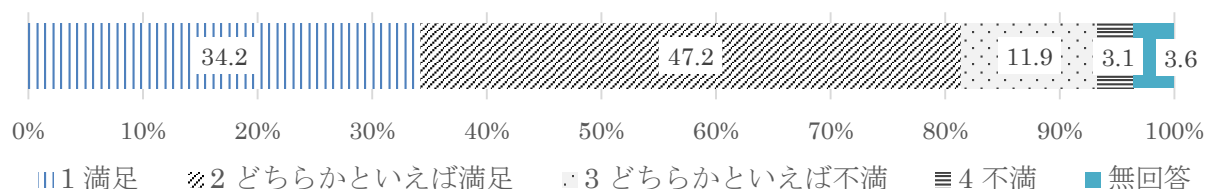


図1 大学生活満足度

考察

まず、本調査の回収率は十分高いといえる。これは、質問紙の作成から実施方法を検討し、様々な方策を講じた結果である。実施にあたった教員からの聞き取りによると、学生はスムーズに回答し、混乱した様子もなかった。このことから、回答内容についても信頼性が高いと思われる。次に、(4)や(6)の結果から、学生は大学生活を通じて、様々な能力を身につけたと成長を実感している。(5)の結果と合わせると、満足度の高い学生が多かったと考えられる。これは、実施日が学位授与式であったことと関連が高いだろう。したがって、結果の解釈について今後検討が必要である。

さらに、学籍番号を記入してくれた学生の割合が半数と多かった。これは、調査の実施を教員が行ったことと関係しているだろう。卒業生アンケートのようなIR活動において、教員の協力が不可欠であることを示している。

以上のことから、本調査は本学学生の成長を推測することができる資料として十分価値があると思われる。この結果を得られたのは、様々な方策を講じ、企画・実施・分析を教職協働で行うことができたからであろう。ただし、本調査は学生の意見や意識を問うものであり、客観的な指標との比較はできていない。そこで、学生の学習活動に関する教学データと関連づけることが必要であろう。

参考文献等

鈴木淳子(2011). 質問紙デザインの技法. ナカニシヤ出版.

大学基準協会(2016). 大学評価ハンドブック 申請大学用・評価者用(改訂第2版). 公益財団法人 大学基準協会.

リチャードD. ハワード編 大学評価・学位授与機構 IR研究会訳(2013). IR実践ハンドブッカー-大学の意思決定支援-玉川大学出版会.